

昭和31年3月卒業

第26期

昭和29年秋季～30年夏季



チーム紹介 鈴木音安監督談

わがナインは、2年生は3人だけでトップコンディションにある。超高校級といわれる斉藤投手のダイナミックなスピードボール、救援投手としては江坂が控え、彼の硬軟自在、強靱なカーブ・シュートもAクラスのものだ。このデュエットをコンビとして対戦すると、まア大抵のチームはペースに狂いがおきて、目をくらますこと必定だ。

アナとされた打撃のムラも、ようやくとれてきたし今年こそは長年の不運から脱却して竜虎の試合を挑みたいと思っている。今までは投手オンリーチームであったが、打撃本位のチームにカラーを変えたので、おいそれとは球場を去るまい。遊撃伊藤を本陣として塚本、田中、佐藤の布陣も敏捷で堅実だし、従来の能高チームより今年はひと回りスケールが大きくなっている。

◎昭和29年

・秋季県北

能代5-0小坂

準決勝 能代10-0能代工

決勝 能代15-2鷹巣農

・全県選抜

能代0-1秋田商

◎昭和30年

・春季県北

能代9-3大館鳳鳴

能代4-0能代商

決勝 能代3-5能代工

・第3回全県選抜（8校出場）

能代6-3本荘

能代1-2秋田商

・全県大会（24校出場）

能代0-1本荘

本 荘	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
能 代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（本荘）小石一打谷

（能代）斉藤一今野

〈部長〉小笠原恒太郎

〈監督〉鈴木 音安

〈部員〉3年生

◎今野 勘一 松嶋 誠一

伊藤 一雄 田中 哲也

斉藤 操 鶴木 重悦

川村(塚本)佑幸

思 い 出

川 村 (塚本) 佑 幸

能代南高校から能代高校と改称された昭和28年4月に26期生として入学、3年間野球部に在籍以来50年を経ており記憶も薄れ間違いがあったら御容赦願いたい。入学時部員も少なく新入生4～5名入部しても総員で12～13名と記憶しています。それでも上級生の活躍で奥羽大会に出場し遠野高校に1対2で惜敗。（佐藤九市が本塁打）

戦後初めて秋田高校が甲子園に駒を進めた年でもあります。（三塁手と右翼手が能代二中出身者）

終戦後、日も浅く物資に恵まれず、グローブは先輩のお下がりやを、スパイクシューズは新品でしたが3年間使用しました。ボールも硬式とは名ばかりで中にはブヨブヨになるまで使い試合になって初めて硬い球を使える状況でした。バット振りの練習ではバットが少なくノックバットも使用さ

れました。

28年春季全県選抜大会では能代駅を一番列車(6時前)で出発、秋田の広小路にあった柳屋スポーツ店で2〜3本バットを購入し手形球場で試合をした記憶があります。28年の秋季大会は部員も少なく中学時代の野球経験者の協力を得、全県選抜大会に出場しました。29〜30年度は部員も若干増え15〜16名位で推移しました。全県大会は何れも本荘高校に1点差で2年連続敗れる結果に終わりました。8年後の昭和38年には28、29年度と一緒に甲子園を目指した球児、太田久監督の指導宜しきを得、昭和7年初参加以来雌伏30年能代高校悲願の甲子園出場を果たしてくれました。その後3回計4回の甲子園出場を果たしています。

今は環境も整備され野球をするには最高の条件が整っていると思われます。先輩達が元気なうちに、もう一度甲子園出場を願っています。又、甲子園で皆と一緒に校歌を歌える日を楽しみにしている今日此の頃です。

参考試合となった公式戦

田 中 哲 也

今から50年前の古い試合を紹介します。

昭和29年9月26日、新装なった能代球場(公園内)で高校野球新人秋季全県大会が、台風15号の接近でグラウンド・コンディションが悪い中で開催された。出場チームは、秋高、秋商、能代、横工の4校で争われた。

第一試合は、午前10時から開始され前半は互角に試合が進んだものの後半打力に勝る秋高が5対2で横工に勝ち決勝戦に進む。

第二試合は、午後2時から能代対秋商戦が能代先攻で始まる。両軍全県1、2といわれた能代(斉藤投手、卒後、秋田鉄道管理局)、秋商(嵯峨投手 卒後、東映フライヤーズ)の両エースの先発で始まった。先攻の能代は2回、4回、6回と3度にわたる1死二・三塁絶好のチャンスをもたれず、秋商も4回2死一塁、右翼線二塁打でランナー本塁を突くも能代の巧守に阻まれ本塁寸前

で憤死。9回裏無死二・三塁の好機も能代の好守備で両軍無得点のまま延長戦に入った。

10回裏、能代無得点その裏秋商無死一塁4番伊藤左翼手の左中間三塁打でランナー生還し、秋商が1対0で勝ち決勝に進んだ。緊迫したゲーム内容からすれば呆気ない幕切れで悔やまれた一戦であった。試合終了後、間もなく台風15号が、本県に上陸し、決勝戦は延期となる。

翌日、昨日の能代対秋商戦でルール適用に誤りがあったというニュースが飛び込んできた。事のおこりは、何回かは忘れたが能代攻撃無死一塁でヒット・エンドランのサインでランナーは二塁に進んだかに思ったが打者に守備妨害があったとの事、審判はランナーアウトで一死走者無、打者同じで再開する(守備妨害の場合、ランナーは元へ戻り、打者アウト。即ち、一死一塁次打者で再開すべき)守備妨害への対応が問題となり数日間新聞紙上での論議が始まる。

対応に苦慮した大会本部の決定は、東北大会が間近であり再試合は日程上無理であり能代・秋商戦は参考試合とし、決勝戦は後日秋田で行うこととした。

台風で延期されていた決勝戦は9月30日午後秋田八橋球場で行われ秋商が秋高を4対3で退け東北大会に出場した。

最後に、50年前の記憶も定かではないので、間違っているところがあったら、訂正しながら読んで下さい。

れました。

28年春季全県選抜大会では能代駅を一番列車(6時前)で出発、秋田の広小路にあった柳屋スポーツ店で2〜3本バットを購入し手形球場で試合をした記憶があります。28年の秋季大会は部員も少なく中学時代の野球経験者の協力を得、全県選抜大会に出場しました。29〜30年度は部員も若干増え15〜16名位で推移しました。全県大会は何れも本荘高校に1点差で2年連続敗れる結果に終わりました。8年後の昭和38年には28、29年度と一緒に甲子園を目指した球児、太田久監督の指導宜しきを得、昭和7年初参加以来雌伏30年能代高校悲願の甲子園出場を果たしてくれました。その後3回計4回の甲子園出場を果たしています。

今は環境も整備され野球をするには最高の条件が整っていると思われます。先輩達が元気なうちに、もう一度甲子園出場を願っています。又、甲子園で皆と一緒に校歌を歌える日を楽しみにしている今日此の頃です。

参考試合となった公式戦

田 中 哲 也

今から50年前の古い試合を紹介します。

昭和29年9月26日、新装なった能代球場(公園内)で高校野球新人秋季全県大会が、台風15号の接近でグラウンド・コンディションが悪い中で開催された。出場チームは、秋高、秋商、能代、横工の4校で争われた。

第一試合は、午前10時から開始され前半は互角に試合が進んだものの後半打力に勝る秋高が5対2で横工に勝ち決勝戦に進む。

第二試合は、午後2時から能代対秋商戦が能代先攻で始まる。両軍全県1、2といわれた能代(斉藤投手、卒後、秋田鉄道管理局)、秋商(嵯峨投手 卒後、東映フライヤーズ)の両エースの先発で始まった。先攻の能代は2回、4回、6回と3度にわたる1死二・三塁絶好のチャンスをものにできず、秋商も4回2死一塁、右翼線二塁打でランナー本塁を突くも能代の巧守に阻まれ本塁寸前

で憤死。9回裏無死二・三塁の好機も能代の好守備で両軍無得点のまま延長戦に入った。

10回裏、能代無得点その裏秋商無死一塁4番伊藤左翼手の左中間三塁打でランナー生還し、秋商が1対0で勝ち決勝に進んだ。緊迫したゲーム内容からすれば呆気ない幕切れで悔やまれた一戦であった。試合終了後、間もなく台風15号が、本県に上陸し、決勝戦は延期となる。

翌日、昨日の能代対秋商戦でルール適用に誤りがあったというニュースが飛び込んできた。事のおこりは、何回かは忘れたが能代攻撃無死一塁でヒット・エンドランのサインでランナーは二塁に進んだかに思ったが打者に守備妨害があったとの事、審判はランナーアウトで一死走者無、打者同じで再開する(守備妨害の場合、ランナーは元へ戻り、打者アウト。即ち、一死一塁次打者で再開すべき)守備妨害への対応が問題となり数日間新聞紙上での論議が始まる。

対応に苦慮した大会本部の決定は、東北大会が間近であり再試合は日程上無理であり能代・秋商戦は参考試合とし、決勝戦は後日秋田で行うこととした。

台風で延期されていた決勝戦は9月30日午後秋田八橋球場で行われ秋商が秋高を4対3で退け東北大会に出場した。

最後に、50年前の記憶も定かではないので、間違っているところがあったら、訂正しながら読んで下さい。

昭和32年3月卒業

第27期

昭和30年秋季～31年夏季



チーム紹介

頭脳的プレーに定評があり速球のコントロールも良い長身のエース江坂を中心に、谷内と投手陣を誇る。春の予選では鷹農に完敗したが、その後は全勝の戦績が示すように攻守ともに伸びている。

◎昭和30年

- ・市内リーグ（8月28日）
能代8－4能代工
能代12－0能代商
- ・全県選抜
能代2－3秋田商

◎昭和31年

- ・弘前対抗（5月）
能代2－0弘前実業
能代1－0能代工
- ・春季県北
能代8－0大館鳳鳴
能代10－0毛馬内
能代0－3鷹巣農
- ・全県大会
能代6－2横手工
能代0－10秋田商

秋田商	2	3	0	1	0	0	0	4		10
能代	0	0	0	0	0	0	0	0		0

（能代）江坂一佐々木

〈部長〉松井 紀夫・小笠原恒太郎

〈監督〉鈴木 音安

〈部員〉3年生

◎江坂 勝彦 佐々木 隆
佐藤 弘 佐藤 英哉
伊藤 政昭 宮腰 誠

斉藤三千雄 伊藤 和彦
大山(坂本)茂夫

最後の夏

宮 腰 誠

昭和31年7月、この年の梅雨明けは遅く、夏の大会は順延につぐ順延でありました。横手工高に勝った私たち、1日おいて、次は優勝候補筆頭の秋商戦です。前年秋の新人戦で今一步のところまで逆転され、2対3で惜敗した相手でした。それだけに燃えました。翌日は雨になりました。当然もう一晩泊まらねばならなくなりました。

ところがです。わがチームの軍資金、底が尽きようとしていることが分かりました。当時の野球部長・小笠原恒太郎先生、「とても泊まってられね、先ず一旦家（え）さ帰るべし」ということになりました。

旅館泊まりを楽しみにしていたチームメイト、一斉に「チュー」、鈴木監督“仕方ねなあ”というお顔をしていました。

その時です。思わぬ提案がされました。「俺のところに泊まれ！」大先輩佐々木満さんの、有難い、将に天の声でありました。小笠原先生が「そんな迷惑かけるわけには・・・」と気を遣ったのですが、満さんのご好意に、小躍りして喜ぶ私たちの姿に、さすがの先生も「ご迷惑かけるしな。よろしく願いますし」ということになり、部員18人、大先輩宅に合宿することになりました。

当時の満さん、3年生の私たちより一回り年上の寅年生まれですから、28か9で、キャリア官僚として国から出向中の秋田県庁の人事課長をな

さってしまして、将軍野の宿舎に住まいしてました。その満さんの宿舎にお世話になることになったんです。朝6時起床、近くの護国神社へ集合し、全員声出しのバット素振り100回。そして、拳振り上げ「目指せ甲子園！」と3度唱え、最後に祈禱して終了。帰宅して朝食が8時、そして練習が9時ということになっているんですが、どうしたわけか練習の出発時刻になると、決まって雨が降り出すんです。それも連日なんです。それでも練習を強行したこともありましたが、土砂降りの高清水小学校のグラウンド、忘れられません。5日間お世話になったうち練習できたのは、この日だけでした。

この間、監督、部長不在ですから、日程は私たちの自主計画で、夜9時から、満さんのミーティングです。楽しみでしたね。私たちのため、おそらく晩酌のお時間もてなかったのではないのでしょうか。

その後、社会人になってから思ったのですが、

今とは全く違い、米不足の配給時代ですから、食べ盛りの私たちのものをどうやって調達できたんだろうとか、奥様にも随分勝手してご難儀おかけしたことなど、何かとご迷惑おかけしたこと恐縮したんですが、しかし、私たちには生涯の思い出とすることができました。

やがて、この間に梅雨が明け、雲一つない夏空の下、秋商戦を迎えました。7月26日八橋球場第一試合。応援団来るわ来るわ、能代七夕・笛に太鼓、大原義正先生率いる大応援団でした。前年秋のこともあって期待が高かったこともあったでしょう。燃えました。でも結果は完敗でした。終わってスタンド前に整列した私たちに、声をからして応援してくれた皆さんを代表した大原先生泣きました。荒々しく怒りもしました。そして頭を垂れる私たちに、泣いて^{ねが}いの言葉をかけてくれました。熱いものが込み上げてきて堪りませんでした。

高校野球最後の夏でした。忘れられませんね。



チーム紹介 相澤東一監督談

今春7名の卒業生を送り出し、残ったのは一塁八代と二塁田中だけだが、八代は体の調子が悪く出場が危ぶまれる。これを2年生と1年生でうめなければならなかったのでチームの再編成をしたようなものだ。このためシーズン初めにはハラハラするような試合ぶりをしていたが、このごろではよほどまとまってきた。

エース谷内はスピードがあり、よく切れるドロップを持っているが、腰が弱く、今フォームを変えているので大会までにはコントロールもつくだろう。内野、外野とも守備はまとまっている。不

安だった遊撃江坂も試合慣れをしてきたので大丈夫だ。打撃は大物打ちこそいないが、トップからラストまでいつでも打ち出せる。結局問題は投手難だ。リリーフに伊藤の起用も考えている。実力をフルに出して戦うが、むしろ来年に期待してもらいたい。

◎昭和31年

・秋季県北

能代2-1 鷹巣農

能代15-0 花輪

能代20-6 能代商

決 勝 能代3－4大館鳳鳴

・全県選抜

能代2－5本荘

◎昭和32年

・春季県北

能代1－2鷹巣農

・第1回能代選抜

能代6－5大館鳳鳴

能代2－7秋田商

・全県大会

能代2－5大曲

能代	1	0	0	0	1	0	0	0		2
大曲	0	0	0	5	0	0	0	×		5

(能代) 谷内－伊藤 (紀美)

(大曲) 加藤－栗林

〈部長〉 小笠原恒太郎

〈監督〉 鈴木 音安・相澤 東一

〈部員〉 3年生

◎八代 修一 田中 鍵

私の高校3年間

主将 八代 修一

私は、昭和30年4月樽子山にある、県立能代高等学校に入学した。その前3月、入学式までの約2週間、硬式野球部の春季練習に参加させてもらった。ここで初めて硬式なるものを手にしキャッチボールをした。バッティングキャッチャーもしプロテクターとレガースを着けた。硬球やプロテクター等は私の親父も野球をやっていた関係で子供の頃から、見たり触ったりはしていたが実際に身に着けたり投球したりしたのはこの時が初めてであった。やはり、軟式とは違い、バットもボールも重かったし非力な私には、相当の負担になるだろうと感じた。しかし、好きで入った野球部、頑張らねばとも思った。

昭和30年夏、日夜練習に励んだものの、県大会では2回戦本荘高校に0対1で敗れた。この時の部員は、3年生6名、2年生8名、1年生2名の16名であった。

昭和30年秋、冬2年生8名、1年生は私と田中君の2名（春先には10名入部したものの何故か8名退部してしまった）、高校生活初めての夏休みも冬休みも殆ど練習に明け暮れた。特に冬休み期間は、湊城三小の体育館を借りて、基礎体力造りに励んだ。現在は、どんなトレーニングをしているか判らないが、当時は器具なんて殆どない時代でしたから、その辺に有る物を利用してやった記憶がある。準備体操から始まりウサギ跳び、腹筋運動、肋木を使つての懸垂運動、縄跳び、ダッシュそしてバットスイング等々、最後に三小から又衛門橋往復のランニング、これが長距離苦手の私にとっては一番大変であった。いつもドンジリ2～3人に入って、やっと完走と記憶している。

昭和31年春、新入部員が9名入り、やっと19名となりグラウンドでの練習も一通り出来る人数となった。この年、弘前の高校との交流リーグ戦が始まり、第1回大会が能代で開催された。我々は、江坂主将を中心に投打好調で優勝する事が出来た。この時の出場校は、能代高、能代工、能代商、弘前高、弘前商、東奥義塾の6校であった。

県大会は、その直前の大会等で優勝もあり、勢いがあったものの、秋田商に0対10と惨敗してしまった。

この年は天候不順で、順延又順延と続いた。これを書くにあたり古い書類を引っ張り出したら、私が個人的に記録していたスコアブックがあり、その最終ページに当時の事がメモ的に書き綴っているのを見つけたので、ここに少し記してみる。

昭和31年7月18日 降雨のため中止となる。この夜から、佐々木満さん（第15期）のお宅に全員が泊まる事になった。（総勢20数名）

7月19日 今日朝から雨で中止となる。午後晴れ間を見て高清水中で6時近くまで練習した。夜10時過ぎから又降ってきた。

7月20日 昨夜からの雨がまだ降っている。晴れ間を利用して護国神社へ参拝に行ってくる。バット振りだけで今日は暮れてしまった。

7月21日 予定では今日から試合であるが、グラウンドの状態が悪く今日も中止となった。午前

中は八橋までランニング、高清水中でキャッチボール、バット振り、午後はトス、フリーバッティング。

7月22日 いよいよ試合の日がきた。我々は八橋で第四試合だ。全力で当たるのみだ。自分はバッティングをなんとかしたい。しかし、試合は残念ながらエース江坂さんが打ちこまれて、0対10で秋商に敗れた。

昭和32年春、新入部員1名で計18名となった。この年の夏の大会前に、能代で第1回全県選抜能代大会が開かれて能代勢3校も出場した。我々は1回戦鳳鳴と対戦し、6対5で勝ちましたが、2回戦は秋商と当たり残念ながら2対7で敗れた。夏の大会は、ここ数年1試合だけで終わっているので、今年こそはエースの谷内を軸に勝ち上がろうと頑張ったものの、今一步力及ばず大曲高に2対5で敗れ、私の硬式野球生活は終わった。この3年間たいした活躍も出来なかったが、私なりに一生懸命頑張ったつもりである。今思えば、市内リーグ戦、県北大会等でも勝ったこともあり、喜びもあったが、その反面夏の大会は1勝も出来ず、悔しい思いもあった。しかし、この3年間は、成績は今ひとつでしたが、貴重な時間であったと思う。忍耐と努力を学びました。そして卒業してからも野球を続けたおかげで大きな大会にも出て、優勝も経験することができた。今なお、草野球で汗を流す喜びを感じています。

今も思うと苦々しい“八橋球場”

田 中 鍵

昭和31年春3月20日、能代市島町から午後11時半過ぎ強風下に出火し、たちまちのうちに1,800戸余りを焼きつくした。能代第二次大火の発生であった。私は1年生と2年生になる中間生であった。新しい1年生は未だ入学してこない春休みだったのです。世の中あんまり怖いもの知らずの元気な能高生、青春生でしたが、この大火の凄まじさを見て驚き火事は怖いものだ、痛く心

から感じたものです。明るる日、部員全員集合し確認した結果類焼した部員は幸いなことにいなかったのです。部長の小笠原恒太郎先生の言葉があり、「今日一日、休め」ということで練習は休みとなった。

我が樽子山のグラウンドの桜が未だつばみの頃、待望の新生が10人程入ってきた。皆体格が良く丈夫そうで元気があった。レギュラーポジション取りに気の入った練習をしないと危ないぞ、180センチ余りの背たけと、力のある一年生がゾロゾロといったのです。164センチの自分が勝てるものは無いのか、それは速く走ること、走塁の技をつけることでした。スライディング、打球の強弱方向判断、走者のときの相手野手の位置、走力、肩の強弱、など、走ることにしても野球には色々な項目があります。

桜が散り始める頃、能代公園の方から微かに聞こえてくるのがペレス・プラードの「セレソ・ローサ」のマンボでした。鈴木音安監督は大変ユニークな監督で、練習が終わった後全員を集めて得意げにそのステップや、チャチャチャのリズムステップまで、また別の日にはバットをゴルフクラブに見立ててスイングとか、ルールまで教授してくれたりもした。そして今思えば練習中の水分補給に余りうるさくなかったのは大変よかった。きつと上町の医師石田先生がコーチとしてノックバットを振っていたからだと思った。で、ある時はコーラを持ってきて皆に飲ませ、吹き出すところを見て喜んでいた。私はこの時初めてコーラという飲み物を飲んだのだが、やはり飲み込むことができなかった。

話は一年前に戻って、昭和30年の秋、新人戦、能代高校はエース、江坂勝彦さん、捕手佐々木隆さんのバッテリーで県大会へ出場した。県中央2校、県南北から各1校の四校で第8回東北大会出場を賭けて戦った。我々は秋商と対戦して3対2で惜しくも敗れたが、江坂さんは好投し強打線をよく抑えた。安打数では能代高が上回っていたのだが！その秋商には、三平（後にプロ入り）、三浦の速球派投手2人、控え捕手には佐々木吉郎（後

にプロで完全試合達成)等がいた。そして、県代表として東北大会決勝戦で好投手中島を擁する八戸高に3対1で敗れたのである。これで我々は、「やるぞ、やれるぞ」の自信を深め、「打倒秋商」と、目標をしっかりと据えたのである。冬期トレーニングで鍛え、そして年を越え、3年生の斉藤操さん、今野勘一さん、塚本佑幸さん、松島誠一さん、田中哲也さん、鶴木重悦さん、伊藤一雄さん等が卒業された。少なかった雪も消え、土が乾きはじめて頃の矢先があの大火だったのです。落ち込んでいても仕様がなし、復興に手助けすることでもできなかった。練習に励んで「打倒秋商」で能代市の意気を上げよう、との部員の意気込みは素晴らしく燃え上がった。

そして夏7月17日、いよいよ第38回全国高等学校野球選手権秋田県大会が八橋球場で参加校25校により開会された。自分は初めての夏本番体験である。入場式からもう“あがって”しまって、フワフワした気分で、地に足が着かない感覚、目が落ちつかなかったりして大変だったことが今でも思い出される。試合は横手工戦が初戦となり、これに勝つと目標の秋商との対戦となっていた。横手工戦は6対2で勝利した。

その後、次の日雨が間断なく降り続いて延期となった。朝、日中に降り、夜には止むというおかしな天気が続いたのである。それにより試合予定日が大幅に狂い始めたことで別の心配事が起きたのです。費用、予算のやり繰りに支障が出てきたのである。それまで宿泊していた旅館を引き払い、当時土崎に住まわれていました大先輩の佐々木満さんの自宅に総勢20人近かった生徒が、どっと押しかけて一週間も泊まってしまうことになったのです。今も、大変お世話になったことに感謝の気持ちでいっぱいです。

毎日が雨、雨、練習はグラウンド確保も難しく十分にできなかった。晩飯が終わると散歩をしたり、護国神社の境内で誰が先導したのか、変な替え歌をうたわせられたり、アベックを覗き見したりしてあんまり誉められるようなことはしなかった。しかし、勉強するものは一途に勉強したものであ

る。3年生はこの大会が終われば、すぐにまた練習がまっているのです。進学、就職試験が控えていたのです。ひとときの息抜きもあれば、引締めもあったが、この一戦に対する意気込みは積もりに積もった。さて、いよいよその日がやってきたのです。朝8時の試合開始だ。じらし雨がウソのように朝から抜けるような青空だった。夏の雨上がりですので蒸し暑くだまっていたもジワジワと汗ばんでの八橋球場。三塁側スタンドには太鼓・笛・ミニチュア七夕灯籠、いわゆる能代七夕の一行応援団である。

以前から知っていたことですがこの球場は外野センターからホームベースを見るとマウンドが高く捕手のサインが見えないのである。センターを守る大山茂夫さんも困っていたが、しかしどうすることもできない。レフトを守る自分からはよく見え影響はなかったのですが、もう一つ太陽安打かエラーか、どちらとも取れるこの現象である。

この日の試合は午前8時開始されたのですが、先攻は秋商1回表、2点先攻されてしまった。それは2死一・二塁で打球はレフトを守る自分への飛球、一瞬に太陽を見てしまったため定位置より前へポトリと落ちた。イージーフライだったのに、なんとも悔しかった。2回表、1死二塁でまたもレフトへの飛球。グラブに当たったが落球し1点を失う。どうも秋商は意識してレフトを狙った攻撃をしていると、感じ取った。全くしたたかである。時間が経つにつれて後は捕球することができたが、しかし後の祭りであった。結果は10対0、8回コールド負けとなった。3年生の皆さんに悪いことをしてしまったと、謝っても謝り切れない。元には戻らない悔しさがありました。主将の宮腰誠さんより慰めの声をかけられて、涙がドツと溢れ出て止まらなかった。どう行動すればいいのかわからなかった。茫然自失の状態だった。応援団一行の大原義正先生の「来年から七夕を持って来ての野球応援はやめたじゃ…」と言った言葉が耳に残っている。

翌年、3年生になると監督が相澤東一さんに変わった。「俺自身、あの時もう少し野球を知って

いればなあ…」と言った言葉も印象に残っている。そして、鈴木音安さん、相澤東一監督の尽力で今では第47回を重ねる全県選抜高等学校招待野球大会（能代選抜）が能代第二次大火で市民・高校球児の落ち込んだ気持ちを奮起させるべく第一回大会が開催されたのです。我々は記念すべき出場選手となった。この大会の目的は早く能代の高校から甲子園出場を果たしたい願いが狙いだった。昭和38年夏、情熱一心の太田久監督の下、簾内政雄投手を中心に見事甲子園初出場を勝ち取ったのです。

監督ら相つぎ辞意

（北羽新報 昭32.8.29より）

ここ数年間、不振が続いていた能代市の高校野球界は今年の県大会で、いずれも一回戦で大敗、

高校野球界の再検討が叫ばれていた。県大会のあと、各校の監督は、いずれも辞意をもらし一応能工と能商は、このほど留任に決まったが、能高はまだ正式に決まっておらず、9月の県北新人戦には専任監督なしで試合に臨むことになった。相澤監督が去年の就任のとき「夏の大会まで」という条件をつけていたので、8月に入ってから、ほとんど姿をみせていない。学校側では、29日に会議を開き監督問題を決める予定であったが、都合により、9月中旬まで延期した。

相澤監督は「仕事や家庭の事情で留任は困難だ」ともらし、9月初めの県北新人戦までは先輩が交代で指導することになった。松陵会長の佐藤憲一郎氏も「早急に監督問題を決め野球部の再建策を講じたい」と語っているが、コーチ、スタッフの問題で相当深刻化するものとみられている。

